

Letters

Arpak

レターズアルパック

VOL.249

ISSN 2432-5295

脈

C O N T E N T S

- ◆【脈】…01～04
- ◆今、こんな仕事をしています…05～08
- ◆新人紹介…08
- ◆近況&イベントのお知らせ…09～10
- ◆まちかど…裏表紙

「なりたい自分」とは
地域再生デザイングループ／浅田麻記子

大阪・関西万博の公式キャラクター・ミyakミyakは「なりたい自分を探して、いろんな形に姿を変えている」そうですが、2024年は年齢的にも節目の年であり、「なりたい自分」を考えることが多かったように思います。今の状況は大学生の頃までに思い描いていた「なりたかった自分」とは全く異なっていますが、まだその頃の「なりたかった自分」を諦めるわけにはいきません。少しでも近づけるように、仕事はほどほどに…を今年の目標としたいと思っています。とはいえ、現在、私史上最も頑張っている伊丹空港近くでの公園も万博期間中に一部開園するため、まだまだ山場の続く年明けとなりそうです。

文脈、山脈、脈絡、脈拍など「脈」は（意味のある）つながりを表す言葉です。建築や都市計画ではコンテクスチュアリズムという言葉を連想する方もおられるでしょうか。地域の歴史や文化などのコンテクスト（＝文脈）を尊重して建築や都市を作っていくという、現代ではある意味で当たり前の考え方です。そこでは地域の見えないコンテクストをいかに見い出すかが問われます。

脈

一方、かつて磯崎新は建築を連歌のように関連づけて都市を作っていくというコンセプトを提唱していたことがあります。こちらはいかに魅力的なコンテクストを作り出すが問われます。

コンテクストを見い出すのも作り出すのも建築家やプランナーに求められる能力。観察力と想像力を磨きましょう。2025年最初のレターズアルパックをお楽しみください。

レターズアルパック編集委員会

都市・大阪 その脈々
ソーシャル・イノベティブデザイングループ／石川俊博

「脈」という話題とのことで、そういえば当社は本社が京都で京都には古都の歴史・文化が「脈々」と受け継がれ…のような話を考えたのですが、書いていて大して面白くなかったので私が住む大阪について書くことにします。

大阪は、京都と異なり都市のイメージが安定しない印象があります。京都よりも早く都がおかれた歴史を持ちながらも古都のイメージはなく、国際港湾都市、宗教都市、商業都市、工業都市などなど、さまざまな姿に変化を遂げてきました。

一つのイメージにとどまらず、変転や転生を無限に繰り返すその姿こそが、大阪においては脈々と受け継がれてきた都市の精神なのかもしれないと感じます。

脈々と受け継がれてきた大阪の博覧会の歴史
都市・地域プランニンググループ／石川聡史

大阪の博覧会というと、1970年の日本万国博覧会EXPO'70が有名です。1990年の国際花と緑の博覧会を覚えている方も多いでしょう。しかし、1983年に大阪城公園で大阪城博覧会が開催されたことを知らない人も多いのではないのでしょうか。ミyakミyakのようなキャラクターはいなかったと思いますが、それにあわせて大阪城公園駅と大阪城ホールがオープンし、御堂筋パレードが行われるなど大阪のまちが盛り上がっていたことを覚えていきます。

このように博覧会の歴史が脈々と受け継がれてきた大阪で、今年は何かと話題の大阪・関西万博が行われます。どんな盛り上がり方を見せてくれるのか期待したいと思っています。

脈拍
総務部／岩城優香

私は健康診断で血圧を測る時、いつも不思議な気持ちになります。

何が不思議かというと、腕帯を巻いてしばらくすると体の内側からドクッ…ドクッ…という動脈を通じ全身に血液が送られる、今までは感じていなかった音が湧き上がってくるからです。

普段は意識していないですが、体を維持するために体の中で様々な活動が絶えず行われているということを実感します。日々の生活を送る中でも、あまりにも当たり前すぎて意識できていない事が沢山あるのだと思います。

今年はそんな普段は気付いていない微細な感覚を見逃さず、大切にしていきたいと思っています。

脈打つスポーツ
建築プランニング・デザイングループ／石橋昂大

年初めというと、皆さんは何を想像されるのでしょうか？初詣やおせち、お子さんやお孫さんがいる方はお年玉なども連想されることでしょう。そんな私にとっての年初めはスポーツの全国大会です。箱根駅伝、高校ラグビー全国大会、高校サッカー選手権など様々な競技の白熱した戦いが繰り広げられます。特に私を魅了するのは、これまで培った選手間の深い信頼や技術が脈々と繋がって一つのゴール、得点につながる瞬間です。私自身も10年近くラグビーを続けた経験があるので、競技の力強さや情熱、スリル、そして瞬間ごとの興奮が伝わり、自然と気持ちが高ぶります。まさに「脈打つスポーツ」です。2025年は脈打つ体験を業務の中でも体感できるようにエネルギーに頑張りたいです。

ミyakから始まる思考旅行
地域再生デザイングループ／木下博貴

「脈」と聞いて困り果て、万博のミyakミyakを調べることにしました。ミyakミyakは、細胞と水がひとつになったことで生まれた、ふしぎな生き物だそうです。ここで興味を引いたのは細胞です。2024 年は STAP 細胞の騒動から 10 年となり、様々なメディアが不正に関する課題を論じています。一方で、数年かけて研究過程を見直し、なぜ誤りに至ったのか原因究明されていることも知りました。単なる不正で終わることなく、再生医療の実現に向けた飽くなく研究を知り、まちづくりに携わる自分も感化されるところとなりました。まさか、脈から細胞、まちづくりにつながるとは思いませんでした。有意義な思考旅行となりました。

葉脈の如きかな
サスティナビリティマネジメントグループ／植松陽子

ここ数年、小グループで無理せずをモットーに低登山を楽しんでいます。四季折々の自然を感じながら、身も心もデトックスすることができる良い時間です。春は芽吹き、夏は木漏れ日、秋は紅葉、冬は落ち葉を踏みしめ、葉っぱだけでも様々な楽しみ方ができます。

葉っぱの葉脈は複雑縦横に絡み合い、水と栄養を送る「血管」と、太陽光を存分に浴びるために葉を横に向ける「骨」の役割を果たしています。一部寸断されても他のネットワークを選択でき、リスク回避も万全ですね。

私も葉脈の如く、よどみなく循環し続け、誰かの何かの支えとなるべく、しなやかな一年にしていきたいと思います。

脈々とつなげる？
生活デザイングループ／竹内和巳

某キャラクターを想起するタイトルになってしまいましたが、最近いくつか、標題について考える機会がありました。

- ・野球界の選手会加入・不加入
- ・自治会不参加世帯の自治体へのゴミ収集要望（税の使い方含めて）
- ・某パック社の使われない互助会費

カテゴリはてんでバラバラですが、社会基盤が安定してきた中で、共助の役割の再咀嚼が求められているのは同じで、社会の縮図を感じます。もっとも、咀嚼前に、団結が必須となる社会情勢が訪れる可能性もありますが…少し真面目な文章になってしまいました。引き続き、社会への違和感を抱えつつ、都市や住まいのあり方を楽しく考えたいと思います。みなさま、本年もよろしくお願いいたします。

地方で感じる人とのつながり
都市・地域プランニンググループ／城本大暉

私は学生時代、研究活動や学生団体の活動を通じて地域に深く関わる中で、多くの人々との出会いから貴重な経験を得ました。地域住民や行政担当者、地元企業の方々との意見交換を通じて、自分の視野を広げ、地域の課題や可能性を多角的に捉える力を養うことができました。それぞれ異なる立場や背景を持つ人々との対話は、単なる知識の共有にとどまらず、共感や信頼を築く大切さを実感させてくれました。このように培った人脈や経験は、現在も自分の活動の基盤となり、新たな挑戦を後押ししてくれる大きな財産です。これからも業務を通じて、新たな出会いを大切にしていきたいと考えています。

不整脈人生
都市再生・マネジメントグループ／中井翔太

不整脈と診断され、早 30 数年経ちますが、今のところ循環器系の大病などではなく、現在に至ります。

国立循環器病研究センターによると「不整脈とは、脈がゆっくり打つ、速く打つ、または不規則に打つ状態を指す。」とのことですが、振り返ると私のまだ短い半生も、一定のリズムではなかったなと感じます。同じ歩調で進めるとそれは安定した人生と言えるのですが、私の場合、これからは立ち止まったり、全力で走ったりを繰り返しながら、平均すると健康的な脈拍値にある。そのような少し人より短い人生を歩むのだらうという小さな覚悟を、当寄稿を通じ、得させていただきしました。

脈拍とテンポを楽しむ話
生活デザイングループ／堂本健史

まず脈拍を測る。私の場合、だいたい 1 分間に 60 拍だ。このテンポをスマホのメトロノーム・アプリで再生し、イヤホンで聴く。再生音は耳触りにならないものを選ぶ。この状態で一日を過ごす。

歩くときは自然と手足の動きはだいたいテンポに合ってくる。このテンポが歩きやすいと感じる。

仕事のときは集中するうちに音が消えていく。ふと我にかえり音が戻る。その音を楽しんでみたり、気分転換に珈琲を飲んでみたり。

なにか焦りがあるときには、思い直して脈を測ってみるとよい。脈とメトロノームは同じテンポだろうか。

脈打つ仕事とのめぐり逢い
都市再生・マネジメントグループ／西村創

「脈」という言葉から、私はまず「血液の流れ＝鼓動」を連想します。仕事において「脈を感じる」という瞬間を考えると、新たな命が生まれるような瞬間、新しい人との出会いや、意見を交わし合い、時に熱く議論する中で、想定を超えた化学反応が生まれる瞬間に近いものがあるのではないのでしょうか。

「これってもしかして？」と心が動くような小さなきっかけを大切に、そこから生まれる可能性を丁寧に育てていくことで、やがて大きな「脈」へとつながるのだと思います。

今年も、皆さんと共に「脈打つ」ような一年を歩んでいければ、とても幸せです。

目指せ離島の山脈！
企画政策推進室／中村孝子

大学時代は、京都の某大学のバックパッキングクラブ（日本の大学で最初にできたバックパッカーのクラブ）に所属して、登山が中心の旅をしていました。必死に登った山の頂から連続する山脈の風景は、格別で心身ともに浄化されて清々しい気分になります。以前の特集でも書きましたが、日々、「SHIMADAS」（シマダス：日本の島ガイド）と「しま山100選」（日本離島センター）をチェックしています。

コロナも終息したので、体力のあるうちにあこがれのスイスアルプス、マチュピチュなど、海外の絶景ルートを攻めてみたい気もしますが、まずは仲間と一緒に日本の島山からチャレンジしようと思っています。

脈拍があがる＝ドキドキまちづくり（名古屋圏）
都市・地域プランニンググループ／福井秀樹

愛・地球博、JRセントラルタワーズ開業、名古屋城本丸御殿復元、MRJ初試験飛行（後に失速）などはドキドキしました。今後はリニア開通や名鉄名古屋駅の再開発にドキドキするでしょう。昨年では愛知県スタートアップ支援拠点施設「ステーションA i」。トヨタ自動車はじめ多くのものづくり企業が集積する産業県・愛知県ですが、世界で生き残って行くためにはスタートアップと協業して付加価値を高めてゆく必要があるということです。製造業に限らず、ステーションA i発スタートアップの新事業・サービスが、全国・全世界のドキドキまちづくりを創造していくことを期待しています。

脈絡のない話
ソーシャル・イノベティブデザイングループ／橋本晋輔

我が家の子どもはよく「今の話と関係ない話やけどな…」と突然脈絡のない話を始めます。聞いている側としては話題が急に変わるので少し困ることもありますが、よく考えると、こうして自由に話せるのは「安心して言える場」があるからこそだと思います。

このことは、私たちが関わるまちづくりや職場の環境づくりにも通じます。安心して意見を言える場があれば、活発な議論が生まれるきっかけになります。脈絡のない話から素晴らしいアイデアが出てくることもあります。「関係ない話やけどな」と言える空気感をいかにつくるかを、これからも大切にしていきたいと思っています。

各務原アルプスの向こう側へ
建築プランニング・デザイングループ／間瀬高歩

令和6年度は、3箇年担当してきました岐阜県各務原市における小中学校の建替基本方針策定業務の最終年です。市教育委員会が設置されている産業文化センターの高層階からは、各務原台地の北端に連なる各務原アルプスと称される標高350mほどの山並みの稜線や遠景には美濃・郡上の奥深い緑の山脈を眺望することができます。各務原アルプスの稜線は、岐阜市、関市との境界で初心者から中級者まで楽しめる複数の登山コースがあり、濃尾平野の広大な景色を楽しむことができます。

昨夏以来、山歩きから遠ざかっているため、学校施設建替業務を納める今春には、各務原アルプスを歩き、向こう側からの眺望を楽しみたいと思います。

意味のない脈の計測がもたらすもの
建築プランニング・デザイングループ／増見康平

脈という言葉には、妙に親近感を感じる。幼少期から心肺機能強化のトレーニングで、脈を測り、自分の運動強度や心肺機能としての回復力を数値化していたのだが、サッカーから遠のいた現在でも、性懲りもなくスマートウォッチで脈を測っている。特に分析しているわけでもないのに全く意味はない。このように意味のない継続（データ収集）が世の中にはごまんとあり、現時点では意味を見出せないものが多分にある。これらに対して多様な切り口で、価値を見出す結果に結びつけられる（つまり、これまでの脈をつむぐことのできる）、そんな固定概念に捕らわれない、幅のある人間でありたい。

なんの脈絡のないつまらない話
都市再生・マネジメントグループ／山本昌彰

「脈」から「採血」の話。こんな体質の人はいませんか？
採血で気分が悪くなる人。実は私がそのひとりで、いつも
ベッドで採血（そこで笑わんといってください（笑））。

全く恥ずかしい話ですが、これは子供のころからで、健
康診断がやってくるといつも憂鬱でした。最初は、気の持
ちようだとも思っていました。どうやら「血管迷走神経
反射」と呼ばれるもの。いわば体質のようなものらしいの
です。最近になって、大抵の病院では採血用ベッドの用意
をしてくれるようになり、安心、安心。

なんでこんな話をしているかな。「脈」の話というので。
「なんの脈絡のないつまらない話」ですみませんでした。
では次の人のお話を読みましょう。

未来を共に創っていく
地域産業イノベーショングループ／山口泰生

いよいよ、大阪・関西万博が来年開催されます。仕事柄、
「万博」というキーワードは頻繁に登場し、現在関わりの
ある自治体でも、プレ万博イベントが地域で開催されるな
ど、徐々に機運が高まっているように感じます。その公式
キャラクター「ミャクミャク」の名には、未来への脈々と
続く想いが込められているようです。「脈」という言葉は、
単なる繋がりだけでなく、生命力や発展、そして歴史の重
みすら感じます。

関西万博は、そんな「脈」を未来へと繋ぐ、イノベーショ
ンが生まれ、文化が交流し、新たな価値観が創造されるの
ではないでしょうか。私自身も、この「脈」の中にしっか
りと身を置き、未来を共に創っていきたいと思います。

遠い未来の水脈へ
総務部／若林秀和

一昨年末、父が世を旅立ち、様々な引き継ぎなどで忙しい
日々を過ごしました。早いもので1年が過ぎ昨年末に法要
を営み、恥ずかしくない程度のことはやってあげられたと
思っています。懐かしむのはこれからです。

法要の席ですが、久々に会う高齢の親戚たちは相変わらずに
ぎやかにしてくれました。その少し前に私の姉の子(姪)
に娘が誕生し、私はおばあちゃんの弟となりました。親戚
が集まる中で、姉が赤ちゃんの写真を見せてまわると、「あ
なたの子どもの頃にそっくり！」と話題にしてくれました。
大叔父としては、その姿にただ清らかな水脈のように流れ
続けてくれればと感じるところです。

誰かの気持ちに寄り添うこと
ソーシャル・イノベティブデザイングループ／依藤光代

脈という漢字の成り立ちは、血や気など体の中を流れる
もの、だそうで、「気」の巡りが含まれるのが東洋らしい
と思います。

例えば大事な人や居場所を失った時などは、気が落ち込
み、流れが滞りがちです。相談を受ける側はつい相手を励ま
したくなるのですが、しかし落ち込むのは自然な反応です。

安心して落ち込める、ありのままの自分の感情や意志を
誰かに受け止めてもらえるということが、気の回復や安定
につながります。相手に寄り添うということなのですが、
言葉以上の深みがあります。

子育てや、職場での関係においても大事なこと。言うほど
簡単にはいかないのですが、めざしていきたいところです。

脈々と受け継いだ「お正月料理」
公共マネジメントグループ／渡邊美穂

新年号で掲げた抱負の未達成が続き、今年は幸先のよい
スタートを切りたいです。テーマ「脈」の意味を踏まえ、
自分が脈々と受け継いだモノ・コトで思い浮かんだのは「お
雑煮」「おせちのお煮しめ」です。これらのお料理がお正月
に並ばないのは寂しさもありますが、何より美味しいので
受け継ぎました。そして、受け継いだからには自ずと次世
代へと渡す役割があります。今のところ先行きは不透明で
す。ただ、美味しいという記憶はその可能性を高めるはず
です。手間暇がかかりますが「美味しかった」の一言を貰っ
て1年をスタートしたいです。本年もどうぞよろしくお願い
します。

脈を打つ
建築プランニング・デザイングループ／和田裕介

脈と言えば、ランナーは、「心拍数」をイメージすると思
います。

「心拍を上げられる」ことは、「全身に酸素を運搬できる
能力が高い」ということですが、「最大心拍数－220－年齢」
という残酷な公式があるように、加齢とともに、心拍数も
上げにくくなってしまいます。

ランニングウォッチで正確に心拍数をモニタリングして
いると、公式の正しさや厳しい現実を見せつけられてしま
うのですが、今年は年男かつ、やっとの大阪マラソン挑戦
の年なので、バタバタと自然の摂理に抗いながら、何かと
脈打つ1年を過ごしたいと思います。

文化庁「近現代建築物等の継承と活用に向けた実例調査 及びモデル提案」委託業務に取り組んでいます

筈谷友紀子：

ソーシャル・イノベティブデザイングループ



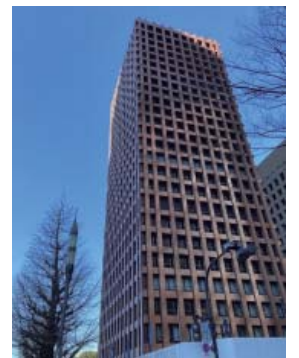
国立近現代建築資料館発行冊子

令和5年に「文化芸術推進基本計画(第2期)―価値創造と社会・経済の活性化―」が閣議決定され、建築文化の振興に関する施策が初めて盛り込まれました。同時に、「建築文化に関する検討会議」が設置され、建築文化の定義について議論されました。そのような背景のなか、当社では建築文化の保護・継承に資する近現代建築物の各種情報収集やそれらの活用事例調査及び国立近現代建築資料館所蔵資料の残存状況の把握調査について支援を行っています。

報道にもあるように、丹下健三の香川県立体育館や前川國男の東京海上日動ビルの解体が決まるなど、近年では近代建築の撤去・解体が進んでいます。これまで、建築物の利活用というと古民家や近代的な意匠の銀行建築など小規模な建築物の事例が多く、店舗を入れたり、ホテルとして再生するなどが一般的ではなかったでしょうか。一方で、時代が進むにつれ大規模建築物も「文化財」としての価値が共有されはじめましたが、維持管理のコストもかかる大規模建築物をどのように保存・活用していけばよいのかと、頭を悩ましていたのではないのでしょうか。特に、モダニズムとは機能主義であり、その機能が終了した際に、別の機能を入れるのがよいのかどうか。議論は尽きません。

近年では村野藤吾による横浜市庁舎の一部を保存した再開発計画が出るなど、大規模建築物の保存・活用事例も散見されますが、「継承」の仕方一つとっても課題は山積みです。外壁保存が「継承」としたことになるのか、併設する高層ビルと調和できるのか。

またどこからどこまでの建築物を保存対象とするのか。海外では建築物だけではなく景観や都市計画などにも視野を広げて保存の枠組みを作っている国・地域も見られます。



前川國男 / 東京海上日動ビル

戎橋筋商店街のオーバーツーリズム対策 “環境マネジメント”を支援しています

竹中健起：

都市・地域プランニンググループ



環境特別委員会で議論した環境マネジメントの考え方

環境のマネジメントを通じて、単なる街内の美化を超えた、商店街として訴求できる価値とは何かを問いながら、店舗、観光客の行動変容を促すムーブメントへと昇華させるべく、引き続き支援していきたいと思っています。

世界各地の観光地でオーバーツーリズムが深刻化している中、大阪・なんばの戎橋筋商店街においても、オーバーツーリズムの諸問題として、特に環境的問題(テイクアウトによる食べ歩きやポイ捨て、混雑等)が生じています。

来年度には万博が控えており、さらなる来街者の増加が想定される中、今年度は答えのないオーバーツーリズムへの対策を研究・実践するべく、商店街・街内店舗等からなる「環境特別委員会」を編成、取組をスタートしました。

本取組のポイントは、店舗・観光客、各主体の当事者としての参加を促すコーディネーターです。街内では、食べ歩きや

ポイ捨て、混雑の発生等を通じて、店舗同士や店舗・観光客間で無用な軋轢が生じています。店舗は、観光客志向に走らず街内の環境マネジメントを担う一員としての意識を持って振る舞うこと、観光客は、観光地に敬意を持ち、環境に対する責任ある行動を実践すること、そのための人の行動デザインが求められています。

委員会で様々な対策を議論する中で、軋轢の解消に向けては、結局は各主体の相互理解を図るためのご近所さんのコミュニケーション・人情が大事であるという発言があり、商店街組織ならではのマネジメントのあり方を感じました。そのような精神性こそが、各店舗が商店街という共同体の一員であるという意識を育み、さらに観光客が真に求める文化的体験にもなり得るのだと思います。

海洋プラスチック問題の解決にむけた実証実験

長沢弘樹：

サスティナビリティマネジメントグループ

海の中のプラスチックごみが増え続けています。

それによって海洋の生態系や、観光・漁業などの人間活動にも影響が及んでおり、全国で世界全体で、この問題に取り組むことが求められています。

大阪湾を漂うごみの9割はペットボトルや容器等の生活系プラスチックだと言われており、大阪にとつて海洋プラスチック対策は大きな課題となっています。こうした中、この年末から年始にかけて、大阪府及び大阪湾プラごみ対策ネットワークの支援のもと、インバウンドを含めた観光客が多く訪れ、春からの万博会場にも近い大阪南港のATC（アジア太平洋トレードセンター）の協力を得て、瀬戸内海のプラスチックごみ対策、とりわけカフェやコンビニで提供されるテイクアウト飲料カップの適切な回収等に協力していただくことを目指した実証事業に取り組んでいます。

この実証事業では、大きく①テイクアウト飲料カップの回収実験、②多言語でのリサイクルボックスへの異物混入防止の啓発、③ATCの従業員やオフィスワーカーへのプラスチック回収の啓発、を実施します。まずは①からの開始で、本事業のメインターゲットである観光客の多い3か所を選んでテイクアウトカップの回収ボックスを設置



しました。

①のテイクアウト飲料カップの回収実験は、特典なしと特典ありの2つのパターンで実施し、効果の違いを検証します。最初は特典なしでひっそりとスタートしたのですが、しばらく観察していると、回収ボックス横に設置した案内板を眺める観光客がちらほらと見られ、海洋プラスチックへの関心の広がりを感じました。

その一方、回収ボックスのゴミの調査では飲料容器の不適切排出やリサイクルに適さない飲み残しなどが幾つも確認され、こうした啓発や行動変容の必要性が改めて浮き彫りになりました。

今後も実証事業の広がりに併せて回収ボックス調査の継続実施やアンケート調査等を行い、海洋プラスチックへの関心の広がりや、実際の行動変容の効果等を把握し、最終的には海洋プラスチック対策の解決に繋がる取組へと進めていく予定です。

ロジックモデルを活用した文化芸術事業の評価マネジメント

江藤慎介：

地域産業イノベーショングループ

各分野の計画策定において頭を悩ますのが「評価」の項目。かつてはPDCAサイクルで評価していたものの、近年はEBPMが浸透し、KPI/KGIといった数値目標を設定することが当たり前になりつつあります。

一方、設定した数値目標をどのように評価するのか、そもそも数値目標を達成すれば計画を実現したことになるのかについては、あまり議論されることがなく、その結果、計画の担当者は「評価疲れ」に陥ることもしばしばあります。

私が主に関わる文化政策分野では、計画や事業の評価を数値で図ることがそもそも難しいとされていますが、近年は「ロジック



八尾市でのロジックモデルワークショップの様子

クモデル」を導入することも増えてきました。私自身も日本評価学会が養成する評価士を受講・認定を受け、「八尾市芸術文化推進基本計画」に掲載されたリーディングプロジェクトの評価マネジメントや、「第8回横浜トリエンナーレ」の事業評価の取組に関わっています。

ロジックモデルは、施策や事業が目的を達成するまでの論理的な因果関係を体系的に図示するものですが、関係者が集まり、「この事業は最終的にいつまでに何を達成したいのか（社会的インパクトや最終アウトカム）」、「その目的は誰に対するものなのか」、「取り組んでいる事業は本当に目的達成につながっているのか」といったことを議論しながら、仮説をつくりあげていくプロセスが重要だと再認識しました。また、作成したロジックモデルをもとに、アンケート調査やヒアリング調査を行い、仮説が達成されているかを検証する中で、数値目標が達成されていない場合はロジックモデルが間違っていたのか、アクションを変えたほうが良いのか等、意見交換していくことが評価マネジメントにおいて大切です。調査・計画策定だけでなく、その後の事業伴走を評価の側面からも応援していきます。

「さつまいも畑」からはじまるグッドサークル

武藤健司：

地域産業イノベーショングループ

みなさんは子どもの頃に芋掘り体験をされましたか？土を掘る作業は、宝探しのようワクワク感があるため、大人になっても思い出として残りやすいのだと思います。

そんなさつまいも堀りは、地域の子どもたちが体験できるように、地元で農業や農業者が中心となり、農業・農村の多面的機能を維持する取組として行われていることが少なくありません。受け入れにあたっては、事前に芋づるを切り、土を少し柔らかくする作業、芋づるの廃棄、安全面への配慮などがあり、なかなか大変です。

大阪府農空間保全地域協議会（事務局：大阪府土地改良事業団体連合会）では、将来にわたって府内の農空間の保全が継続・発展できるよう、大阪・関西万博の共創チャレンジに昨年度登録し、企業等と連携した新しい取組や価値創造に向けて模索しています。その一つとして、「い



天王寺動物園からのお話



さつまいもの収穫体験で発生する芋づる

はたして、芋づるはどんな動物が食べたのか、運搬後は何日間まで保管できたか、子どもたちの学びにつながるようなかなどなど、今回の試行実証を踏まえて、持続可能な取組になるようチャレンジ中です（大阪・関西万博での発表を予定しています）。

も掘り×天王寺動物園」の共創企画に取り組むことになりました。

モデル地域は、高槻市にある三箇牧地区農空間保全協議会。高槻市立三箇牧小学校の1・2年生を対象に、さつまいもの植付けと収穫体験を実施しています。今回の共創企画では、さつまいも畑で発生する「芋づる」を天王寺動物園の動物のごはんとして提供するとともに、動物園で生成された堆肥の活用を図り、「食や循環などの学び」につなげることをめざすものです。

10月下旬、小学校での芋ほり体験と合わせて、天王寺動物園の飼育員さんから動物のごはんや糞について標本とともにお話いただき、芋づるが動物のごはんになること、動物がいることで植物も育つことなど、生き物と食べ物のつながりをクイズ形式で学びました。初めて知る動物の生態に、子どもたちからは多くの質問があり盛り上がりま

カーボンニュートラルは Scope3 の時代へ

江藤慎介：

地域産業イノベーショングループ

世界で脱炭素やカーボンニュートラルの議論や取組が進み、日本でも「2050年カーボンニュートラル」が進められています。

こうした中、豊田市では2021年より「豊田市脱炭素スクール」を始め、現在4期目を迎え、また、トヨタ紡織協力会 Sunshine が主催する「Sunshine 脱炭素スクール」は3期目、ひょうご持続可能地域づくり機構（HCO）も今年度から新たに「ひょうご脱炭素経営スクール」を追加開催しています（ともに大阪大学大学院工学研究科招聘教員（環境・エネルギー工学専攻）を兼任する畑中が全体講師（レタース235号、240号記事参照）。

これまでは自社で使用する電気やガス・燃料等の「見える化」に未着手の事業者が多く、世界・社会動向や脱炭素経営に取り組む意義を伝えながら、Scope1,2を中心とする各社の脱炭素経営アクションプランの策定を応援してきました。

しかし最近、最終製品メーカーからサプライヤーに対して、Scope3（自社の活動に関連するサプライチェーンのCO₂排出量）削減の取組が求められるよ

うになってきました。これに伴い、スクール参加企業からも相談が増えていきます。このため、第4期豊田市脱炭素スクール等では、Scope3への対応や見える化に取り組む特別コースの設置を始めました。

Scope3は製品の原材料調達から製造、販売、消費、廃棄に至るまで15のカテゴリに分かれています。サプライヤーでCO₂排出量が多いと想定されるのはカテゴリ1（原材料調達）、カテゴリ4（輸送・配送）、カテゴリ5（廃棄物）。講義後、調達している原材料の洗い出しをしてみると、中小企業でもScope1,2の何倍ものCO₂を排出しているところもあることが分かってきました。何事も「見える化」は重要です。

なお、本記事に関連し、畑中らが日本LCA学会誌へ寄稿しています（タイトル：自動車関連産業クラスターにおけるサプライチェーン排出量削減に関する動向と課題：豊田市等での取組を題材に）。QRコードからご覧ください。



1300年の歴史から持続可能性を考える ～古からの祈りを未来へ～

中川貴美子：

サステナビリティマネジメントグループ

1月18日のお申し込みはこちら→



日本博 2.0 公式 HP

ロールできない長い時に思いをはせた時に、持続可能なまちに向けて、私達は何をすべきか。そんなことを考える機会になっています。本事業は、公益社団法人ソーシヤル・サイエンス・ラボ、独立行政法人日本芸術文化振興会、文化庁が主催しています。今年度は、1月18日にも開催します。

この旅のプログラム前半は写真体験です。薬師寺は、天武天皇により自分の中宮の病を治すために、祈りの心で建てられた建物といわれています。また、東塔の全面解体修理は国宝ということで国費が利用されていますが、白鳳伽藍復興は全て一般の方々の「お写経勸進」の

浄財でなされています。お写経は、時代とともにその求められる役割は変遷してきていますが、今は、自分の心と向き合うためにされておられる方が多いようです。

午後、薬師寺宮大工の石井浩司棟梁とともに1300年という歴史を超え伝え続けられてきた宮大工の真髓についてお話をうかがいます。西岡常一棟梁から伝えられた「創建当時の工人の心になって仕事しなさい」「うそ偽りのない本当の仕事をしなさい」の言葉をどう受け止め、その真意について、解体修理を通じて、石井浩司棟梁はどう感じたのか。なぜ、1300年もあり続けたのか。お話を聞きながら体感します。

気象災害等の予想技術もない時代に無病息災を願い、また1300年という自分がコントロールできない長い時代に思いをはせた時に、持続可能なまちに向けて、私達は何をすべきか。そんなことを考える機会になっています。本事業は、公益社団法人ソーシヤル・サイエンス・ラボ、独立行政法人日本芸術文化振興会、文化庁が主催しています。今年度は、1月18日にも開催します。

気象災害等の予想技術もない時代に無病息災を願い、また1300年という自分がコントロールできない長い時代に思いをはせた時に、持続可能なまちに向けて、私達は何をすべきか。そんなことを考える機会になっています。本事業は、公益社団法人ソーシヤル・サイエンス・ラボ、独立行政法人日本芸術文化振興会、文化庁が主催しています。今年度は、1月18日にも開催します。

気象災害等の予想技術もない時代に無病息災を願い、また1300年という自分がコントロールできない長い時代に思いをはせた時に、持続可能なまちに向けて、私達は何をすべきか。そんなことを考える機会になっています。本事業は、公益社団法人ソーシヤル・サイエンス・ラボ、独立行政法人日本芸術文化振興会、文化庁が主催しています。今年度は、1月18日にも開催します。

新人紹介

人と街づくりと自分



水神秀哉
総務部

初めまして、今回ご縁があつて、アルパックに入社いたしました総務部の水神です。

生まれも育ちも、大阪の下町育ちで、日本一長い商店街がある天神橋筋商店街が地元になります。

今の商店街は子どもの頃と違って昔の趣きはなくなってきましたが、それでも美味しく安い飲食店が多いので、よく食べ歩きしています。

最近の趣味は、アウトドアです。二十代の頃は、よくやっていたのですが、そこから二十年が（も？）、たつた今友人と気が向いたらバーベキューをしたり、キャンプに行ったりしています。自然に囲まれて、何も考えないようにしようと思ひながら

気づいたら何か考えこんでいるのはまっているような気がしています。

前職は、文房具・雑貨メーカーで勤務しておりました。取り扱っている商材が、小学生向けの文房具が多く、鉛筆削りや筆箱、防犯ブザーやタイマーなどがあり、お子様がいらっしゃるご家庭であれば見たことがあるかも知れません。

今回、転職にあたり、アルパックを知る中で、今まで子ども達が使用する商品に携わり、社会貢献できている感覚を持っていたのですが、ここであれば、もっと子ども達が活き活きと暮らせる街づくり、さらに今の若者、老人関係なく、皆が活き活きと暮らせ、様々な自分達のライフイベントを想像できるような街づくりを支えられる仕事ができるのではないかと思います。そんな「アルパック」で働けることに今ワクワクしています。

「アルパック」で高度な専門性を備えた方達と共に働きながら、刺激をもらい、アルパックのバックを支え、それが街づくり、地域づくりに貢献できるようになればという思いを持っています。

これから「アルパック」も自身ももっと成長できるように頑張っていきます。よろしくお願ひ致します。

経営シミュレーションゲームで、 「熱闘！全社研修会」

倉見祐子：
全社研修会担当

例年より少し遅めに木々が色づきはじめた11月下旬、全社研修会を開催しました。テーマは昨年度同様、「チームビルディングで組織力強化」。しかし趣向は変えて、株式会社プロジェクトデザインさんによる「THE・商社」というゲームを用いて、実施しました。

この研修プログラムを選んだ理由は2つ。1つはゲーム形式であること。ゲームという形で“勝負”をすると、つい夢中になり、人柄や価値観が露わになりやすいものです。多くの所員が集まる貴重な機会に、自分や同僚が持つ性質・特長を短時間で深く知ることができ、共通のゴールに向かってチームビルディングを実践しやすいことが魅力でした。

そしてもう1つは、経営をテーマにしたものであること。個人的な考えにはなりますが、成長する企業の条件とは、カリスマ的経営者や圧倒的技術力があることではなく、「多くの社員が経営に関心を向けること」だと考えます。それによって生まれる自律的・自発的・

利他的行動が、会社を強くし、顧客に選ばれ続けるのだと思うと、今回の研修をきっかけに自社の経営により興味・関心を持つ人が増えることを期待しました。

皆で濃密な時間を過ごしたことで、実施後の社内アンケートは概ね好評な結果となりました。あとはこの後、どう個人の成長や専門性の底上げにつなげていくかは研修委員会の腕の見せ所です。

（社内研修による休業でご迷惑をおかけいたしました。ご協力ありがとうございました。）



適塾路地奥サロン報告

適塾路地奥サロン実行委員会

65回

2024年
11月8日

「適塾を守り伝えるために」

講師 大阪大学ミュージアム・リンクス／大阪
大学適塾記念センター 准教授 松永和浩 氏

福沢諭吉をはじめ幕末維新に活躍した偉人を数多く輩出し、現存唯一の蘭学塾遺構として国の重要文化財にもなっている「適塾」。大阪事務所のお隣さんです。今までそこに「ある」だけだったものが、「知る」ことで急に存在感を増し、価値と重みを感じるものへと変化する。そんな体験を、松永和浩氏のお話によって味わうことができました。

適塾はその塾生が大阪大学医学部の元になる学校をつくったことから、「大阪大学の精神的原点」とも言われています。塾をひらいた緒方洪庵は、医師であり、蘭学者であり、教育者。勉学に励み、性格は温厚篤実、医師として貴賤で対応を変えることはなかったそうです。患者からもさぞ慕われていたことだろう、と思いきや…威光がありすぎて患者からは恐れられていたとか。「患者は『先生より弟子に往診へ来てほしい』と言っていた」というおもしろいエピソードを福沢諭吉は残しています。

この他にも、松永氏からは緒方洪庵やその妻の八重、塾生の福沢諭吉とその仲間達の間人味あふれるエピソードをお話いただき、今まで感じていた偉人像か

らグッと生身の人間感が増し、親しみを覚えました。

その後、適塾を守り伝えるための数々の防災・保存の取組についてお話いただき、そのひとつとして、クラウドファンディングによって実現された「適塾建物の3Dモデル」をご紹介いただきました。これがとても精巧に作られており、この建物で学び、暮らした様子がありありと思い浮かび、より一層身近に感じることができました。

今まで何気なく見ていた適塾建物の一部分も、「ここで緒方洪庵が涼んでいたのか」と思うと重みが増します。適塾建物の展示や公開、それにまつわる情報発信を行うことで、地域の人たちに興味関心を持ってもらい、シビックプライドを醸成していく。それがまた適塾を守り、伝えていくことにつながるということが実体験できた場となりました。

※「適塾建物の3Dモデル」：https://sketchfab.com/Tekijuku_UOsaka/models

余談ですが、会場では大阪大学発の災害支援プロジェクトのストーリーに登場した銘酒「緒方洪庵」の試飲（！）もさせていただきました。日本酒にあまり馴染みがない私でも飲みやすく、香りもフルーティでスッキリとした味わいでした。日本酒がお好きな方はぜひ、大阪大学の公式ショップを覗いてみてください。（倉見 祐子）

近況 & イベントのお知らせ

建築を手入れしながら愛でる

塗師木伸介：
建築プランニング・デザイングループ

アルパックで設計監理を行い、2022年に竣工した寺田町プレイス1が生きた建築ミュージアム大阪（通称：イケフェス）に参加しました。昨年に続き、二回目の参加となり、歴史ある建物に注目が集まるイベントですが、まちなみの新参者も参加しています。

生きた建築とは利用されているだけではなく、キッチンと手入れされていることも重要な点ではないかと思っています。年を重ねていく中で不具合や劣化の進んだところを手入れし、適切な状態を保つことは建物の美観向上にも繋がりますし、愛着を醸成する効果もあります。寺田町プレイス1においても、多くの人に利用してもらったことで剥げてきたベンチの座面や背もたれ、雨掛りとなる壁木部の塗装ワークショップを今回のイケフェスに合わせて実施しました。

ワークショップには参加者として塗装ワークショップを目掛けて来てくれた人やガイドツアーに参加したときに興味を



もった人等、その日、初めて会った人達が集まりました。

建物施工時に木材調達でご協力頂いた田中製材所さんのご指導のもと、まずは塗装面の掃除から始め、その後広い面積を塗る人和其他の素材との境界面を塗る人に分かれ塗っていきます。はじめはぎこちなかった参加者の皆さんも作業を進めるにつれ打ち解けていきます。

そして遂に完成、皆さん自分たちの塗った木部を見て満足そうな顔をしながら眺め、「あそこは上手くいっているね」といって相互に褒め合っていました。

そんな姿を見て、建物が長く愛されるようにまちのみんなで手入れをする、そういった文化がイベントを通して広まると良いなと思いました。



受賞しました

都市コン協会創立 50 周年 コンサルタントのこれから

杉原五郎：
相談役

昨年、11月28日、東京・千代田区のルポール麹町で、都市計画コンサルタント協会創立50周年記念行事が開催されました。芳賀稔会長の主催者挨拶、国土交通省内田欽也都市局長と日本都市計画学会渡邊浩司会長の祝辞に続いて、協会創立以来50年の取組みにおいて功労のあった協会の会長・副会長、理事、委員長など46名が、アルパックからは、三輪泰司名誉会長、柳沢厚さん（前監査役）、杉原の3名が表彰されました。

三輪さんは、協会創立の創成期、関西のコンサルタントを代表して協会の取組みに参加されました。京都駅ビルコンペのプロフェッショナルアドバイザーとして、関西文化学術研究都市の企画・推進に尽力された功績が評価されマスタープランナーにも認定されています。

私は、2008年から10年ほど関西唯一の理事として、都市コン協会関西世話人会の立ち上げ、講習会の企画・運営、まちづくりの現地視察による東西交流などを進めました。

特に、「都市の縮退」「都市の彩」「都市の聖地づくり」「都市のDNA」をテーマとする研究会を企画し、支援

してきました。まちづくりの現場をフィールドワークし、飲食をともにしながら、都市のさまざまなテーマについて口角泡を飛ばす議論をして、事務所を超えた交流を進めてきました。さらに「働き方改革」をテーマに、各社の現状と改革について率直に意見交換する場を企画しました。

都市計画に係る社会環境は、少子高齢化、東京への一極集中と地方の衰退、地球温暖化にともなう災害の頻発など、ますます厳しくなっています。都市計画コンサルタントに求められる役割は、「官民連携走型」「ホームドクター型」「プロデューサー型」など複雑化し、重くなっていくものと予測されます。「仕事でライバル、しかし仲間でもある」との思いをもって、都市計画コンサルタント業界のさらなる発展を祈念します。



功労者記念写真、来賓と共に



バルセロナのスーパーブロック、交差点のど真ん中が歩行者空間に

絹原一寛

都市再生・マネジメントグループ

ま
か
ど

リスボンで開催された WALK21に参加しました

10月14日から5日間、ポルトガル・リスボンで開催された、ウォーカブルに関する専門家や官僚らが集う国際学会 WALK21 に参加しました。

御堂筋回遊プロジェクトのポスターセッションに投稿したことがきっかけです。

世界中から実践者や研究者が集まり、大学キャンパスを会場に多彩なセッション、ワークショップやまちなかのツアーが行われました。政策・意思決定のプロセスデザインに関するもの、ウォーカブルの指標やツ

ルに関するもの、団地や街中の再生計画にウォーカブルな空間を取り入れたもの、脱炭素の効果を論じたものなど、どれも非常に興味深いものであり。

特に秀逸と感じたのが2点。一つは学会専用アプリ。インストールするとプログラム確認だけでなく、全参加者を閲覧しチャットでメッセージも送り交流することが出来ます。もう一つはネットワーキングの仕掛け。会場だけでなく歴史ある市庁舎や植物園とユニークベニユーも意識した素敵な場所、食べ物・飲み物も振る舞われて参加者とディスカッションできる時間がふんだんに組み込まれていました。飲み会で打ち解け楽しむのは万国共通、世界中の方と貴重な交流・情報交換ができました。

リスボンは坂道の景観が印象的で、程よいのどかさがあり、伝統的な音楽ファドに代表される哀愁を感じる素敵な街でした。

その前後には同じくウォーカブルや脱炭素に最前線で取り組んでいるパリ、バルセロナを訪ねる。

パリは念願のシャンゼリゼ通りに。オリンピックも追い風に、各所で歩行者空間や緑地を拡張するとともに、自転車都市を目指して専用レーンをもつすごい勢いで整備していました。

バルセロナのランブラス通りは側道も歩道に変える工事を実施、またスーパーブロックのシェアードストリートは進化を遂げ、コンセル通りは歩車が上手く共存し、歩行者が優先され親子連れがゆったりと緑豊かな街路を楽しむ様子が感銘しました。

いずれの都市も街路の改変を連鎖的かつダイナミックに取り組み、ウェルビーイング溢れる街中を創り出しています。プランナーは海外に出て行き、日本との違いを感じながらも独自性をアピールする経験を積むべきだと思います。大阪・関西も負けていけない、と大変な刺激を得た10日間でした。



坂の街リスボンを象徴するケーブルカー

表紙写真：いのちを育む胡蝶蘭の花脈(撮影 坂井信行)

「レターズ アルパック」は、ホームページからご覧いただけます。

アルパック(株)地域計画建築研究所

Architects, Regional Planners & Associates, Kyoto
https://www.arpak.co.jp E-mail: info@arpak.co.jp

本社・京都事務所

〒600-8006 京都市下京区四条通柳馬場西入立売中之町99 四条SETビル2F TEL(075)221-5132 FAX(075)256-1764

大阪事務所

〒541-0042 大阪市中央区今橋3-1-7 日本生命今橋ビル10F TEL(06)6205-3600 FAX(06)6205-3601

名古屋事務所

〒450-0001 名古屋市中村区那古野1-47-1 名古屋国際センタービル7F TEL(052)462-1030 FAX(052)462-1061

東京事務所

〒101-0032 東京都千代田区岩本町3-1-9 NOVEL WORK Iwamotocho 5F TEL(03)5244-5132 FAX(03)5244-5140

九州事務所

〒810-0802 (株)よかネット:福岡市博多区中洲中島町3-8 福岡パールビル8F TEL(092)283-2121 FAX(092)283-2128

滋賀営業所

〒527-0012 東近江市八日市本町9-19 SATSUKI-RO 内 TEL(090)1422-1096

この用紙は「びわ湖の森を元気にする」
kikitoペーパーを使用しています。